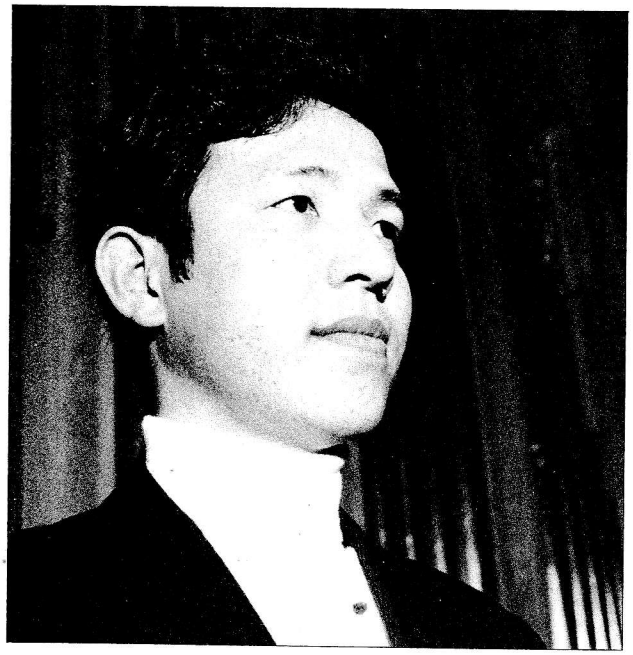
酒井多賀志氏の人と芸術

礒山　雅



パイプ・オルガンは、実に大きな楽器である。楽器全体の容積の大きさもさることながら、その音量も、音のひびく空間も、たいへんに大きい。そこから引き出せる音楽の可能性がまた無尽蔵ともいえるほどで、いくつものパイプが朗々と鳴りひびく時などは、ちっぽけな人間の喜怒哀楽をはるかに超えた、宇宙的な秩序が鳴動しはじめるかのような思いがする。こうした巨大な楽器だけに、奏者に課される負担もまた、並大抵のものではない。凡庸な人が手がけたのでは、まるでオルガンに無理やり弾かされている、という感じになり、茫漠とした無個性な音が鳴り続けるだけになってしまう。オルガン音楽がとかく取りつきにくいものに感じられ、日ごろの鑑賞のさいに敬遠されがちな理由のひとつには、それがある。オルガンを従わせ、オルガンに語らせることのできるのは、ごく少数の芸術家だけである。酒井多賀志氏は、そんな少数の芸術家のひとりであると、私には思われる。

酒井氏の演奏は、オルガンをみごとに掌握している。それは、卓越した技巧によるとか楽器への精通によるとかいう以上に、芸術家としての表現意志にかかわる問題であろう。巨大なパイプ群を自在にあやつりながら、音楽に読みとったものを大胆に打ち出してゆく氏の演奏ぶりは、まことに壮観である。音楽の骨格がつねに明確に把握され、燃えるような情熱がそこに注ぎこまれて、楽天的な生命力が解放されている。「音楽とは、或る存在について語るものではなく、存在のうちに生育する生命の喜びを語るものである」というのが氏の信念であるというが、氏の演奏を聴く者は誰しも、この言葉を納得するにちがいない。たとえ話をすれば、聖堂のパイプ・オルガンとは、洞窟に住む不思議な老人のようなものである。凡庸なオルガニストが声をかけたのでは、老人はあくびをして寝言をつぶやくのみである。しかし、ひとたび酒井氏が呼ばわると、オルガン老人はむっくりと起きあがり、目を輝やかせて語りはじめる……氏の演奏には、そんな雰囲気がある。願わくは、世界の教会に眠る銘器を、ゆり起こして歩いてほしいものである。

酒井多賀志氏の生いたちと経歴を御紹介しよう。氏は、昭和23年1月1日に、東京で生まれた。3人兄弟の末っ子で、会社員であった父は、声楽をよくしたという。氏が3才のとき家庭にリード・オルガンが購入され、これに興味をもった氏は、5才のときから、正式のレッスンを受けはじめた。中学生の頃は声楽家志望だったようであるが、3年生の時に、盲目の巨匠ヘルムート・ヴァルヒャの弾くバッハの《トッカータとフーガニ短調》のレコード演奏を聴き、「啓示ともいうべき衝撃」を感じた。こうして、氏は本格的にパイプ・オルガンへの道を歩むことになる。高校時代は、近くのカトリック吉祥寺教会のパイプ・オルガンを借りて練習、間もなく同教会の洗礼を受けて、専属オルガニストになった。また、教会の聖歌隊でグレゴリオ聖歌以来の伝統的な宗教音楽に触れたことも、音楽への視野を広める助けになった。1966年に東京芸術大学のオルガン科に入学して秋元道雄氏に師事、在学中の1970年に、万国博オルガン・コンクールに参加して最高位の成績を収める。この年大学院に進学し、1972年に、バッハの《クラヴィーア練習曲集第3巻》の研究と演奏によって、修士号を得た。この大学院時代には、合唱指揮者としての活動が開始され、また、杉山好東大教授のもとで、バッハの学問的な研究が進められている。1975年には、ザルツブルク音楽院国際夏期講習のマスター・クラスに参加したが、師のアロイス・フォーラーは、「すぐれた芸術家」として称賛を惜しまなかったと伝えられる。

酒井氏の演奏活動は、大学院進学と共に開始された。1970年5月の万国博キリスト教館でのリサイタルを皮切りに、オルガン・リサイタルはすでに三十数回を数え、チェンバリストとしても、1977年にリサイタルを開いている。日本を代表する合唱団・管弦楽団やソリスト達とも再三共演しており、放送出演や、レコーディングも行なっている。指揮活動もまた活発で、手兵のシュトルム合唱団・合奏団を指揮しての、ルネサンス・バロック音楽の演奏会が好評である（私は、酒井氏が指揮するとき、シュトルムのメンバーたちが氏のオルガン演奏と瓜二つのスケールの大きな表現をみせるのを聴いて、感嘆した記憶がある）。これらの活動以上に特筆しておかねばならないのは、氏自らが主催し、解説の筆もとって行なっている、年2回の個人リサイタルであろう。この企画は、1974年に始められ、1978年6月で、計10回に達した。氏は熱心なクリスチャンであるが、オルガン

芸術は護教的なものであってはならない、との信念をもっている。そこで、教会主催という通常のオルガン演奏会の枠を越え、オルガン音楽を万人に開かれたものとする道をとったのである。会場にも、東京カテドラルのほか、石橋メモリアルホールや神奈川県民ホールといった、一般のコンサートホールが選ばれている。シリーズの人気もなかなかのもので、同一プログラムを２日演奏していずれも満員というのは、日本の演奏家としては稀有のことではないだろうか。オルガンという地味な楽器でのことであるだけに、氏の日本音楽界に対する貢献は、もっと高く評価されてよい。

酒井氏によれば、オルガン音楽史は、最高峰であるバッハの前と後で、全く異なった様相をみせているという。氏の演奏プログラムは、つねにこの趣旨から選曲が行なわれているが、このレコードには、バッハとバッハ以前の音楽が、リサイタルからの実況によって収められている。バッハの大曲を前後に配し、オルガン芸術の源泉ともいうべきスウェーリンクから１曲、南北ドイツのオルガン芸術を代表するパッヘルベルとブルーンスから重要な作品を１曲づつとって、そこにバッハの美しいコラール前奏曲を加えるという、多彩な選曲である。６曲はいずれも第一級の演奏であるが、中でもバッハの２曲は、フランクと並ぶ酒井氏最高のレパートリーであるだけに、はげしい気迫と妥協をゆるさぬ厳しさで、聴く者を圧倒してしまう。とくに、自在なテンポと大らかな呼吸で壮大に盛りあげたニ短調曲のトッカータ部分や、線構造の明晰な再現が至純な喜びにまで高められているハ長調曲のフーガは、酒井氏の最良の演奏に数えられよう。

酒井氏は、ひたむきに音を追求する純粋な音楽家気質の持主であるが、その一方で、深い哲学的思索の人でもある。氏の思索は、講壇哲学のアカデミズムから解放されているだけに、ユニークな卓見と、一芸に打ちこむ人ならではの実践的裏づけをもっており、私は何度も、目を開かせられる思いを経験してきた。そうした思索の一端は、リサイタルごとのプログラム解説からうかがうことができる。しかし、プログラムを通読してみると、かつては思いつきや混乱も少なくなかった氏の思索が、しだいに明晰な筋道をもつようになり、論理的な説得力を増してきているのに気づく。それは、氏の演奏にいちだんと鋭さが加わってきたのと平行した現象とみてよいだろう。酒井氏特有のダイナミックな力感にあふれた演奏芸術は、着実に円熟の道をたどっている。しかしいつの日か、氏の演奏にも、氏の尊敬するヴァルヒャに聴かれるような、静かな瞑想の支配する時が来るかも知れない。コラール前奏曲やイ短調アダージォの情感をたたえた演奏には、その可能性がすでにほの見えている。そんな日の来るまで、私は氏の演奏を見守ってゆきたいと思うのである。

（レコードvol.1 ジャケットより）